



ホスピタルミニ・ニュース PHOTO TOPICS



付き添い生活応援のご支援をいただきました



認定NPO法人キープ・ママ・スマイリングより「付き添い生活応援バックライト」のご支援があり、医師をはじめ病棟スタッフで心を込めてお届けしました。特に長期ご入院に伴う付き添いや緊急入院でご不安な日々を余儀なくされた方々にとって、「こういった温かなご支援を頂戴できることは、心の支えになる」と大変喜んでいただけました。このたびはご支援をありがとうございました。

★ 太陽の塔が金色に!! ★



世界的な小児がん啓発のための「グローバルゴールドセブンパークキャンペーン」の一環として、太陽の塔がライトアップされました。入院中の患児や付き添い者に光のエールを送っていただきました!

阪大病院がんサロンを 第30回 開催します



がん相談支援室では、がん患者さん、ご家族を対象に12月20日に管理栄養士による「がん治療中の食事と栄養」についての講演会を開催します。「具体的でわかりやすい」「レシピが参考になった」などのお声をいただき毎年大変人気の講演会です。ぜひご参加ください。

国公立大学附属病院 医療安全セミナーを開催



6月6日に「令和6年度国公立大学附属病院医療安全セミナー(文部科学省後援)」をオンラインで開催しました。文部科学省

高等教育局医学教育課大学病院支援室の永田昭浩室長ら17名を講師に迎え、全国の大学病院、官公庁、企業等から、医師、看護師、薬剤師、事務職員ら計825名の参加がありました。

今回のプログラムでは、働き方改革下で安全な医療を継続するための円滑な診療情報の共有方法、薬剤師の専門性を活かしたタスクシェア/シフトの推進、日常臨床業務や緊急時に「職種や部署の境界を越えた協働」を実現するための理論や実践、医療への患者参加、質改善の研究手法等が紹介されました。

また、近年、急務となっているサイバーインシデント対策について、被害を経験した医療機関から貴重な教訓の共有が行われました。参加者からは「最新の情報を得ることができた」「ITリスクに対するBCPの重要性が理解できた」等の意見が多数寄せられ、好評のうちに終了しました。

病理診断科

患者さんの適切な治療には適切な診断が必要です。病理診断科では、治療方針決定のため患者さんから採取された検体について、顕微鏡を用いて精度高く観察し病名を診断しています。顕微鏡で適切に診断するためには肉眼診断が大切で、毎日提出された組織検体を丁寧に病理医が肉眼観察し、顕微鏡観察に必要な病変を同定しています。阪大病院病理診断科では現在15名の病理医が所属しており、このうち11名が専門医のライセンスを有しています。病理専門

医は全国で2000名あまりと少ないにも関わらず、本院では多くの病理専門医が日夜診断に従事しています。また、組織検体と比較して侵襲の少ない細胞診検体の場合、病理医が診断する前に細胞検査士が予め確認していますが、資格をもった細胞検査士が8名所属しており、病理専門医とタッグを組んでいます。現在、組織診、細胞診をあわせて年間24000件程度を診断しています。

近年実装化されたがんゲノム医療でも病理診断は重要な役割を果たします。がんゲノム医療では、病理検体からゲノムDNAやRNAを得てその異常を調べますが、検体中に腫瘍がほとんど存在しなければ異常を検出できず、検体中ほどの程度腫瘍細胞が存在するかなど多数の情報が必要です。また病理検体を固定する時に用いられるホルマリンは一般にDNAやRNAの質を低下させるため、適切な固定ががんゲノム医療の成否を決めます。このため、がんゲノム医療に供する検体の質保証も病理医に求められています。

日々、多くの検体を扱っていることから、検体の取り扱いについては特に神経を使っており、当科ではバーコード管理システムを導入し、検体の取違いを防ぐ仕組みを構築しています。様々な操作を自動で行える状況を整えており、できるだけヒューマンエラーを防ぐ努力をしています。精度管理でも高い基準が求められており、ISO15189の国際認証を受けています。また本院では臓器移植を行っている関係で、緊急性を要する検体作成がルーチンで求められることがあります。そのため、受付から診断までを3時間で行えるシステムも整えています。正確な病理診断を行うためには、臨床各科と緊密な情報共有が必要で、臨床各科とのカンファレンスを緊密に行い、一刻も早く正確な診断が患者さんのもとに届けられるように日夜努力しています。

脳卒中センター



24時間365日受け入れ

脳卒中は、大きく分けて血管が閉塞することで生じる脳梗塞と血管が破れることで生じる脳出血とくも膜下出血に分類されます。症状は脳卒中が生じる脳の部位によって異なりますが、突然の意識障害、半身の脱力、言語障害で発症されるケースが多いです。また、くも膜下出血に関しては高度の頭痛で発症されるケースが多いです。

脳卒中は発症後に症状が増悪することがあり、速やかな受診が必要です。そのため、脳卒中市民公開講座を開催し来場者に対して啓発活動を行います。

脳卒中は、近隣の救急隊・消防隊と協力体制を強化しております。同時に若手医師の育成が欠かせませんので、医学生や研修医も含めて脳卒中中の急性期治療、特に超急性期の脳梗塞治療が大きく様変わりしました。超急性期脳梗塞の治療として2005年が日本で静注血栓溶解剤(r-tPA)治療が承認された年になりましたが、近年はカテーテルによる血栓回収療法が普及し、安全に非常に有効な治療が出来るようになりました。当センターにおきましても血栓回収療法を常時施行可能な体制作りを行っており、日本脳卒中学会からPSC(一次脳卒中センター)コア施設に認定されました。もちろん脳出血やくも膜下出血に対しても効果的な治療を行っております。

脳卒中のスペシャリストが常時対応

野々村病院長おすすめ 夏の中華御膳

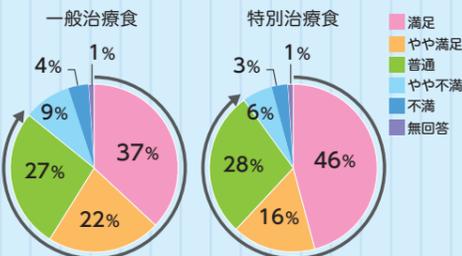


- 黒酢豚
点心
チンゲン菜の中華和え
御飯
杏仁豆腐

今回のおすすめ御膳は、病院食では頻度が少ない中華料理をテーマに、野々村祝夫病院長からの酢豚、点心、杏仁豆腐といったリクエストを取り入れて入院患者さんにお届けしました。特に酢豚は普段使わない黒酢を使うことで、まるやかでより本格的な味に仕上げました。患者さんから「久しぶりの中華で嬉しかった」「酢豚がいつもと違ってよかった」「杏仁豆腐が食べやすかった」などたくさんのご感想をいただきました。また、病院長の写真と直筆のメッセージを添えたカードにも「嬉しかった、飾っています」と嬉しいお声をいただきました。

病院食アンケート

食事の満足度



入院患者さんを対象に病院食アンケートを実施しました。食事の満足度については、一般治療食では86%、特別治療食では90%の方から『満足・やや満足・普通』と回答いただきました。特別治療食の方へ「朝食に食べたいメニュー」をうかがったところ、「卵料理」のリクエストが多く寄せられたため、スクランブルエッグ等の新メニューを追加しました。また、「毎食のメニューを楽しみにしている」「退院後の参考にします」等の嬉しい感想もありました。今後「おいしい、自宅でも作りたい」と思ってもらえるような食事を目指して取り組んでまいります。